

原始時代に逆もどりし、人口も何百万分の一に減らさなければならぬだろう。私たち地理を学ぶ者は、自然の保護と自然環境の保全とが、その立場を異にすることをわきまえて、いわゆる進歩的文化人たちのいう空虚な主張と、実際の社会生活を営んでいる人たちの切実な要求とを、聞きわけだけの識見や能力を身につけたいものである。

ヨーロッパで思うこと

大和田 順子

レオナルド・ダ・ビンチ空港からバスで1時間、ローマ市内に入ると、アパート群が立ち並んでいる。このアパートの高さは大体4階乃至5階、地域の高低によって4階だったり5階だったりしていて、建物の高さがほぼ一定している。日本のように、ところどころに48階建があったり15階建があったりしているのとはちがって、高さのデコボコが少ない。これは法律で高さの基準がきめられているとのことであった。そしてアパートのすべての窓という窓辺には、花が美しくかざられていた。赤いゼラニウムと真紅のバラの花が多かったが、地中海性気候の澄みきった紺青の空とあかるい太陽の下に、まことに美しい調和をなしていた。日本のようにすべての窓が洗濯物のオンパレードとはちがっている。

スイスではなおさら美しい。国全体が観光に気をつけているせい、すべてが公園のように整備されていて、紙くず一つ落ちていなかった。イタリアやイギリスでは大分紙くずの散らかっているのを見かけたが、スイスではほとんど見られない。これは毎日早朝道路清掃人が掃除をするからだということだった。そして各家庭の窓辺はやはり美しい花で飾られており、庭には花が真紅に黄色に美しく咲き誇っていた。私の行った時期が観光のシーズンであったせいもあるが、スイスの人達は自分達が生活して楽しいだけでなく、それを眺める人達にもこころよい気持を与えるよう心づかいをしており、生活の余裕と豊かさを如実に示していた。

フランスやベルギー、オランダでも同様であった。ベルギーやオランダのあたりになると位置がかなり北になるので気温が低くなるせい、花は家の外の窓辺ではなく、室内の窓のあたりに飾られるようになる。したがって、窓枠の色とかカーテンの色とかが外から眺めて気になるので、窓枠の色とかカーテンの色が法律できめられているとか、いろいろと凝った模様の白いレースのカーテンがとても印象的だった。勿論洗濯物など干していない。洗濯物を外に干すことのできる日は月曜

日だけときめられており、国民みんながそれを守っている。

このように国全体が観光に気を使っており、自分達だけが生活してゆければ何でもよい、他人は一切おかまいなしというのではなく、他人が外から眺めても気分が良いように配慮して、国全体が調和と統一の美をなしている。さすがは生活の余裕と歴史の重みのあるヨーロッパだなと感心させられた。わが国でも、このようなヨーロッパの良い点はまねて、できるだけ花いっぱい生活をすよう、建物には高さの基準をきめるよう、そして紙くずを散らかさないようにするなどすれば、少しずつでも私達の生活にうるほいを持つことができ、暮し易くなるのではないだろうか。

ゾウの道とコココーラ

門 村 浩

東アフリカのケニアでの地形調査のとき、たいへんお世話になったものの中に、ゾウの道とコココーラなどビン詰めのコールド飲料水がある。これら2つのものは、ある意味で東アフリカの現代における状況を象徴している。

1971年に再度ケニアを訪れた目的のひとつは、熱帯半乾燥地域における基盤岩の風化断面の特徴を調べ、その地形形成に果たす役割を検討することであった。このため、ハンマーを震源とする簡易地震探査を、ベディメントや基盤岩を切る平原の上で行なった。時期はちょうど乾季であったので、乾性サバンナやブッシュランドであれば草が枯れているので、どこへでも簡単に測線が展開できると考えていた。ところが、地図や空中写真上で選んだ現場に行ってみると、有刺性の背丈の低いブッシュが意外に密生しており、測線を思ったようには展開できない。トゲにさされながら適当な場所はないかと探しているうちに眼にとまったのが、ブッシュの中を縦横に走っているゾウの道である。中には、まだ真新しいフンのころがっているものもあり、ゾウが近くにいることが予想される場合もあったが、思いきって作業をすすめることにした。ゾウの道は、決して真直ぐではなかったが、それでも作業の能率を大いに上げさせてくれた。

ところで、東アフリカの国立公園では、前にも書いた(地理17巻5号)ように、ゾウの過集中に起因する植生の破壊に悩まされている。人間の活動範囲の拡大により、ゾウの主たる生息領域が国立公園のような狭い地域に限定されたためである。ツェボ国立公園では、空中写真でみると、ウォーター・ホールから無数のゾウの道が放射状につけられているところがある。これは、植生が破